

1. 研究課題名：アジアバロメーターを通じたアジア人の生活・規範・価値の実証研究

2. 研究期間：平成17年度～平成20年度

3. 研究代表者：猪口 孝（中央大学・法学部・教授）

4. 研究代表者からの報告

(1) 研究課題の目的及び意義

アジア社会は「実証社会科学体系的データの砂漠」と言われる。本研究計画は「アジアの普通の人々の日常生活」を欧米の世論調査と比較できる方法を使いながら、アジア社会の歴史的文化的な特異性に十分配慮した研究設計によって、いままでになかったアジア社会の貴重な世論調査データを作成する。さらに、一時喧伝された「アジア的価値観」に代わる「アジアにおける市民の人間・社会観」の統一的概念化を実証的に裏付けしながら試みる。とりわけこの20年間大きな流れとなっている「グローバル化」に対する態度・行動がアジアではヨーロッパにくらべてもより前向きで開放的なものになっていることに注目し、アジアの普通の人々の人間・社会観の統一的概念化を試みたい。それに寄与していると思われる「新中間層」がどのような性格を持つかについても概念化したい。

本研究計画の特色の第一は、草の根レベルで普通の人々の日常生活からアジアを見ることである。第二に、アジアの現地社会学者と一緒に質問票を作り、一緒にデータを分析し、一緒に成果を刊行することである。さらに、第三は、アジア地域で初めての膨大な世論調査データに実証科学的分析のメスを入れ、アジアの人々の考えや気持ちを欧米社会科学で発展してきた命題がどこまで有効か、アジア諸地域ではどのような命題が適切か等々、社会資本、社会階層化、国際関係などについて国際的にも先端的で、先鋭的な知見を輩出させる事である。

(2) 研究の進展状況及び成果の概要

アジア社会を南アジア、中央アジア、東アジア、東南アジアに分けて、初年度平成17年度(2005)は前二地域、18年度(2006)は東アジア、19年度(2007)は東南アジアで世論調査を行った。20年度(2008)は各亜地域とも言える日本、中国、インド、インドネシア、カザフスタンでより大きなサンプルで調査を行う。現地社会学者を集めて各国分析論文や主題分析論文を発表討論するため、毎年度調査ごとにアジア・バロメーター・ワークショップを開催している。2006年2月(2005年度)、2006年12月(2006年度)と開催し、2007年度は、2007年12月に開催予定である。同じく、毎年度調査ごとの分析論文は英文学術書として刊行され、翻訳後は日文書として刊行される。現在は、2005年度世論調査論文の学術書刊行に迅速に向かっている。2006年度の東アジア世論調査の英語論文は、*Japanese Journal of Political Science*の2007年11月号にも特集される。

また、3つの研究チームを作り、新しい命題や知見を得た。比較政治学では伝統的な社会資本(信頼)がグローバル化によって後退し、逆に一般化された社会資本は増大するという命題、比較社会学では、旧英米植民地だった社会では英語力、高所得、市場自由化が連結しているのに対し、その他では英語力が高所得に結合せず、伝統的価値観も保持されがちという命題を得た。国際関係論では、日本、米国、中国などを含む国際的相互認識や、重要な二国間関係に関する認識の国内要因分析が可能になった。

5. 審査部会における所見

A (現行のまま推進すればよい)

調査は順調に進んでおり、従来世論調査が行われたこともない国々で調査が実施されたこと、データの公開も迅速に行われていることは評価できる。またサンプル数を増やすなどの対応は評価できるが、各国の政治社会的な状況も勘案しつつ、サンプリング方法の妥当性については継続的に見直すとともに、現地調査者との連携を蜜にして調査結果の信憑性を高めるよう努力されたい。さらに、公開されたデータの利用促進を一層図るとともに、各国別の分析にとどまらず、国際比較を通じて、研究成果がより国際的にインパクトを持つよう、例えば、調査についての引用数を増やす方策を検討して欲しい。